85年の歩み

85th Anniversary

徳島市民病院85年の歩み

徳島市病院事業管理者
露口　　勝

　徳島市の市議会で市民病院を設立しようという計画がはじめて論議されたのは明治26年9月25日のことである。徳島市が市民病院を興して県下医学の進歩を図り、公衆衛生の向上に寄与しようという事案であったが、困難な市の財政の中では賛成者少数で建設計画が見送られた。

　次に市民病院の建設計画が持ち上がったのは昭和2年3月の市議会である。この時期に市民病院設立の要望が出てきた背景には、都市施設としての上下水道の設置や都市の公共交通の要望が出され、社会生活の中で保健衛生への関心が高まり、医療機関の充実が求められるようになったことがある。徳島市においても大正15年9月に上水道の給水が開始され、昭和3年3月の市議会では市営乗合自動車の創設費23万988円が可決されている。

　昭和2年3月18日の市議会において市民病院設立案およびその予算が可決され、徳島市は徳島本町1丁目にあった市役所（現在の徳島地方裁判所北側国道沿い）隣の民家の土地と建物を買収し、その家屋を改造して昭和3年2月1日に市立実費診療所として開院した（図1）。この昭和3年の診療所設立が徳島市民病院の始まりである。それ以来、時代の移り変わりとともに市民の医療ニーズに応えながら、病院は増築や改築を繰り返し、設置場所を転々と変えている。

図1．市立実費診療所

　昭和3年2月の開設から今年（平成25年）で、徳島市民病院は創立85周年を迎える。7回目の新病院が完成した折でもあり、この機会に市民病院の誕生からこれまでの歩みを徳島市史第5巻（民生編、保健・衛生編）など、いくつかの資料を参考にしながらたどってみたい。

1．市立実費診療所

　昭和3年1月25日付の徳島毎日新聞は、市立実費診療所の開所を予告して次のように報じている。「徳島市の実費診療所は、いよいよ来る（昭和3年）2月1日午前10時から千秋閣で開所式を挙行することに決定。知事・県各部長・医師団代表・社会事業関係団代表・新聞記者・市会議員等百余名を招待」

とあり、当時徳島市がこの診療所の開設に大きな期待を寄せていた状況が良く分かる。

初代診療所長として大阪医科大学（現在の阪大医学部の前身）より小山順治医師を招聘し、職員は小山医師（内科）のほか書記、薬剤師、看護婦、看護助手兼小使、車夫兼小使がそれぞれ１名、計６名であった。新進気鋭の小山医師の人気は高く、治療費が一般開業医に比べて安価であったことから、利用者は急激に増えて、翌月より内科医師をもう１人増員した。さらに同年５月には市民から強い要望の出ていた産婦人科を新設し、産婦人科医師１名と産婆１名を採用して公設産院を開設している。この開設に伴い市立実費診療所の利用者はますます増加し、古い民家を改造しただけの施設では対応が困難となってきた。

２．市立中洲病院

市立実費診療所が市民の人気を集め、盛況であることは非常に喜ばしいことであったが、施設の狭さから患者への対応が十分にはできかねるようになってきた。これを解消するため昭和３年に閉院した私立三宅病院「所有者三宅速、徳島市堺裏町字巽浜３番地の２（現徳島市幸町３丁目22番地）」を買収し、ここに診療所を移転する方針を立て市議会に提案した。この案に異を唱える議員もあって賛否の論戦があったが、病院の拡充を望む世論のバックアップもあり移転案は認められた。市は早速に買収交渉を始め、昭和５年２月に持ち主の三宅速（後の九州帝大外科初代教授）から土地と建物を４万6,319円で買い受けることができた。市は買収した建物の補修繕を行い、同年４月13日に市立診療所を徳島本町からここに移し、名称を市立中洲病院と改

図２．市立中洲病院

称した（図２）。

移転後の中洲病院は施設に余裕ができたこともあって、翌５月に外科と眼科を開設し、同年12月にはレントゲン科（牧野利三郎部長）が新設された。その後昭和９年に小児科、同10年に耳鼻咽喉科、同11年に経費１万2,000円でラジウム50mgを購入し、レントゲン科を理学的診療科と改め、ラジウム治療を開始した。

以上のような段階を経て中洲病院は、内科、外科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、小児科、理学的診療科の７科を擁する病院となり、入院室は最初27室であったが、増改築を重ねて入院病床84床となり、総合病院としての役割を果たすようになった。この病院の職員数は医師17名、薬局員５名、産婆３名、看護婦15名、同見習31名、事務局員７名の計78名であった。

当時同病院の院長であった小山医師は、短期間のうちに診療科を増やし、病院施設が充実し、患者数が増加していったことについて、自著書（一診療所長より大学病院長まで）の中で以下のように分析している。中洲病院は当地域内では唯一の公立病院であって、治療費が一般の開業医に比べて低廉であったこと、

そして新進気鋭の医師たちに恵まれ、職員一同が一致協力して診療に精励したこと。その実例として、診療開始時間が夏季は午前８時で、冬期は午前９時であるが、夏冬ともそれぞれ30分前には各科の医員、看護婦、薬局員、事務員をはじめ小使にいたるまで全員が仕事に従事したことを挙げている。このようにこの病院の職員は１年中、所定の時間より30分ずつ早く出勤して勤務につくのが普通で、誰一人不平を言うものはなかったという。

しかし一方では、患者の増加に伴って施設の狭隘と病院側の人手不足をきたすことになった。その状況について徳島毎日新聞（昭和11年８月10日付）は「忙しさを通り越した中洲病院」という見出しで、次のような記事を載せている。「中洲病院は１日の患者数700人を突破する盛況で患者間で順番の競争が起こり、午前６時ごろから受け付けに殺到して係りの看護婦が悲鳴をあげるだけでなく、７つの診療科に集まってくる患者を取り扱うには現在の病院は狭すぎる。廊下が事務室兼患者待合室など非常時的光景である。これでは患者も困るであろうが、院長・部長以下下足番に至るまでが、患者の犠牲になっている感じがする。現に看護婦など甚だ手不足とのことであり、医員間に健康を損なうもの相次ぐとの消息も聞く。設備の拡張、充実等は新築竣工まで待つとしても、さし詰め医員以下従業員の増員は急務と見られる」と。

中洲病院の建物施設が来院患者数に比して狭くなり、大改造を市議会に提案したが、現在地での改造では敷地に限界があり、もっと広い土地で広壮な病院を建てるべきであるという意見が多く出て、市議会の総意は中洲病院の移転に傾いていった。市議会で決めた中洲病院建築調査委員の一行５名は、名古屋、岐阜、松本、神戸、津、堺、横須賀、静岡の各市立病院を視察し、病院の規模と立地条件、診療費、伝染病院との併設関係および職員の給与などを調査して帰ってきた。この調査内容を参考にして、設置場所については新蔵町にあった元専売局の跡地が候補地に挙げられた。この移転改築する病院は徳島市字新蔵町南30番地（現新蔵町３丁目31番地）で用地を買収し、昭和12年12月に着工、同13年11月に竣工した。

3. 市立市民病院（新蔵町）

新蔵町に新築した市民病院の全容は敷地面積3,544.67坪（１万1,697.4平方メートル）、建物延べ面積2,129.64坪（7,027.8平方メートル）で、本館には内科をはじめとする７診療科の診察治療室、事務室、薬局、手術室、研究室、試験室、医局を備え、外来患者の待合室には売店も設置されていた。ベッド数180床で、そのほかに看護婦寄宿舎もあって四国一の総合病院としての威容を誇っていた（図３）。

図３．市立市民病院

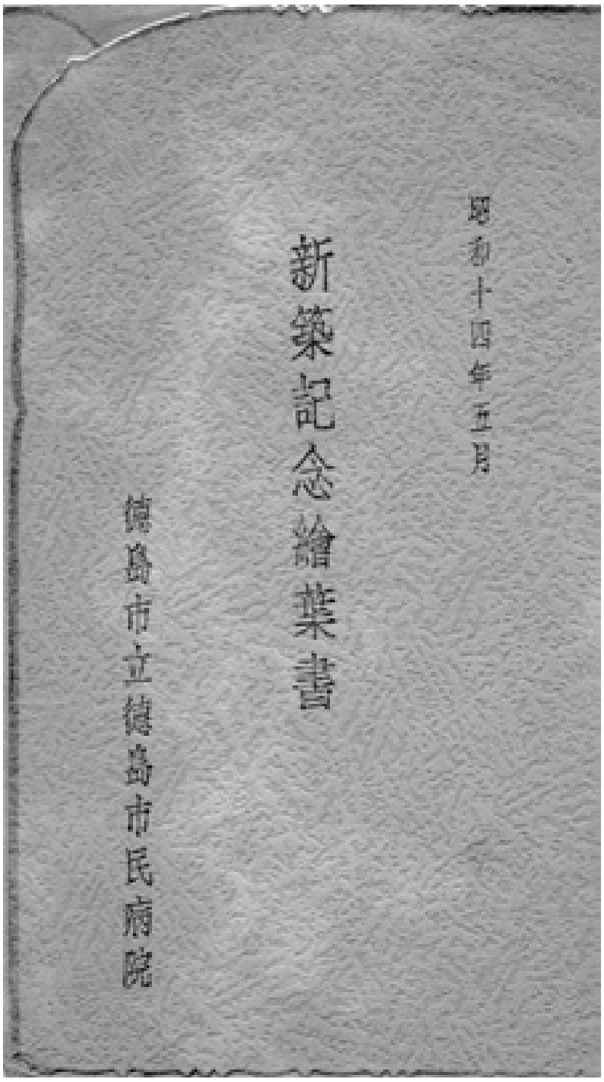


図４．絵葉書の封筒

中洲病院から新しい病院への移転は昭和13年11月29日から始められ、12月の３、４日の両日で入院患者の移送を完了して12月５日から診療を再開した。病院の名称を市立市民病院と改め、移転改築落成式は昭和14年５月28日に盛大に挙行された。この落成式の参列者に記念品として、この新病院の絵葉書が贈られたようである（図４、５）。

徳島市の病院事業は昭和３年２月１日に市立実費診療所として開所して以来、黒字を続けていて、新蔵町に移った市民病院においても市民の要望に応える診療姿勢が功を奏し、経営的にはますます順調に推移していた。

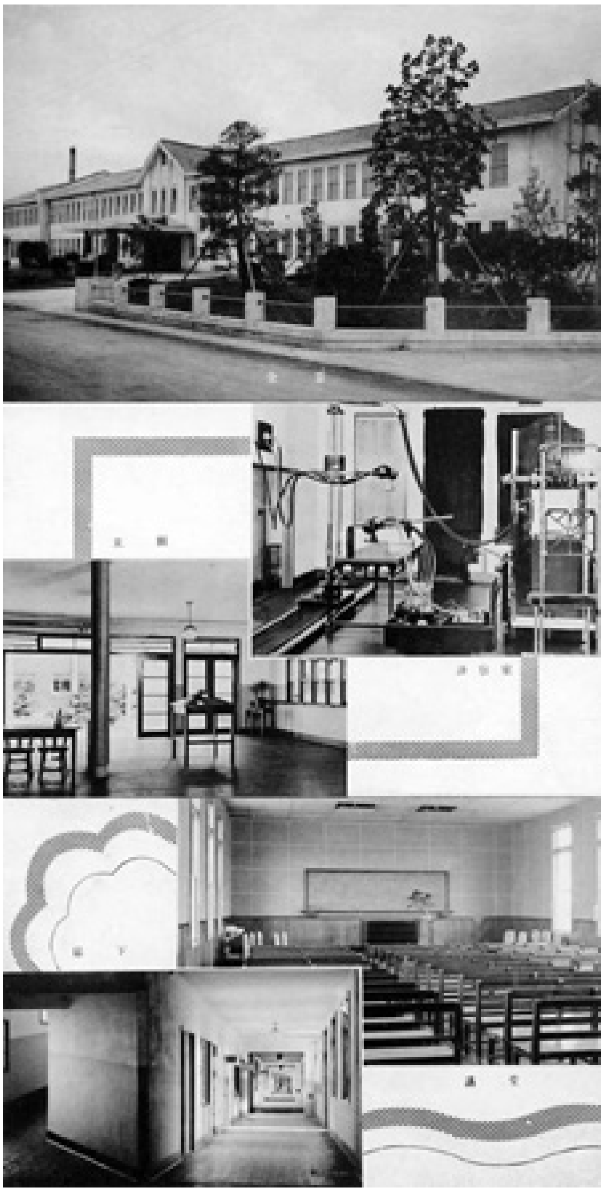


図５．３枚組の絵葉書
（元病院長　日下和昌氏提供）

昭和15年６月８日付の徳島毎日新聞の論調で「黒字の市民病院、黒字だけは市民に戻せ。社会事業として再検討の要あり」といわれたほどであった。

市民病院の利用者は増加し、経営的には黒字が続いて病院としては順調に推移していたが、世の中は次第に戦時色が強くなっていった。昭和16年12月には太平洋戦争に突入し、出征兵士が多くなっていく中で、国内の男子が減っていった。病院においても医員で応召

される者が増えるし、開業医も戦地に送られることが多くなって、病院でも地域においても一般の診療に支障をきたす状態が出てきた。そのような世情であった昭和17年の夏に市民病院にとっては思いがけない事態が起こってきた。

この頃軍部が軍医の不足対策として官立医学専門学校の設立案を練っていることを知った辻山治平徳島県知事は、森六郎徳島市長と連携して徳島にこの官立医専を誘致する構想を持ったのである。

4．県立医学専門学校から国立医学専門学校へ

徳島市長は医専を徳島に誘致する前提として、市民病院を医専の附属病院に寄付するという案件を市議会に図ることになった。小山市民病院長の著書によれば、昭和17年の夏のある夜、突然市長から電話がかかってきて、今夜8時から市民病院の講堂で臨時市議会を開くから、私にも是非出席するようにということであった。そして議案の内容を聞いてびっくりした。それは徳島市に官立医学専門学校を誘致する前提として、第一に市民病院を県に無償で寄付し、第二にそれを母体として官立医専を設置するという案であった。市長からの議案の説明で市会議員諸氏も初めて知ったほどであった。しかし、結局は官立医専の附属病院にするという条件つきで市議会は満場一致で原案を可決したのである。

それ以来、医専問題が新聞紙上を賑わすようになり、中央でも軍部と文部省との折衝の結果、官立医専を4校新設する予定であると報道された。そして「有力な市民病院を持っている徳島市と松本市および完備に近い県立病院を持っている鹿児島県と青森県との4ヵ所が最も有力である」と新聞はしばしば報道し、世間もこれを信じていたのである。ところがその年の秋になって政府は、官立医専の設置について、全国で唯1校群馬県の前橋に設立すると閣議で決定したのである。この決定を知って徳島市および市議会は非常に憤慨したが、これには後日談があって、戦前の中島飛行機が地元の群馬県に医専を誘致するため多額の寄付を申し出て急転直下前橋に決まったとのことである。徳島と同じように官立医専の候補であった鹿児島県では、早めに官立を断念して県立医専の設立に変更したことが伝わってきた。

徳島県が県立で医専を設置するということは県議会の承認を得なければならないことであり、多額の費用を要する事業で県としても容易なことでなかった。一方、徳島市は医専の設立を前提として市民病院を無償寄付する議決を市議会で行ったこともあって、県立医専の推進を強く望み、県に要請した。それらの努力が効を奏し、文部省からは徳島県から申請があれば、認可するという内諾を得、県は県立医専の設置に踏み切ったのである。そして昭和18年2月26日に徳島県立徳島医学専門学校新設の認可を得ることができた。

なお、市民病院の職員は昭和18年4月1日に全員県立医専附属病院の職員として任命された。その職種および人員は医師20名（うち5名は応召中）・薬剤師6名（うち1名は応召中）・産婆2名・事務職員5名・看護師20名・看護婦補10名・その他25名、計88名であった。

昭和13年に新蔵町で新築開院した市立市民病院は、昭和18年4月1日に県立徳島医

学専門学校の附属病院となり、昭和20年4月1日に県立医専が国立医専に昇格したのに伴い、附属病院も当然のこと国立医専の附属病院となった。この医専設立が現在の徳島大学医学部誕生の礎になったのであるが、その年の7月に徳島大空襲で新蔵町の附属病院はすべて消失してしまった。

5. 戦後の徳島市立診療所（北福島）

昭和20年7月の徳島大空襲によって徳島市の中心市街地のほとんどが焼けて壊滅状態となり、一時的に都市の機能を失ってしまった（図6）。医療施設もそのほとんどが被災し、診療できる状態ではなかった。徳島大空襲は被災者が約7万人で、死者約1,000人、負傷者約2,000人と推定されている。

図6．戦災後の徳島市街地

戦災による混乱があり、焼け跡の片付けも十分にできていない8月15日には、敗戦という衝撃が重なったのである。そんな中から復興の胎動が始まり、医療施設の復興について徳島市は市立の医療施設の再開を急ぐことになる。早速、徳島市は独自で診療所の開設を計画し、「10月12日徳島県知事宛開設許可申請書を提出、10月22日認可あり、10月23日開所診療を開始せり」と徳島市事務報告書に記載されている。

当時、この診療所の開設と同時に勤務された多田節子医師は「徳島市医師会史（平成6年刊）」の中で、当時を回想して「市立診療所は北福島の伝染病院の西側にある焼け残った木造の建物であった。昭和20年の秋ごろのことであった。橋本所長と私と2人で診療を始めていたが、そのうちに片岡義雄先生が復員されて外科・耳鼻科を診療し、私は内科・小児科を担当した」と語っている。図7は昭和初期の伝染病院の写真である。多田医師によれば、この西側に診療所があったようであるが、その写真は残念ながら残っていない。

図7．昭和初期の市立伝染病院

徳島市立診療所は北福島町2丁目（現福島1丁目）の元市立救護所であった建物を利用して開設され、後に永谷鼎先生が復員されて所長となった。この市立診療所は戦災直後という特殊な条件の中で開設されたため、設置場所が市域全体から見て東に片寄り、交通も不便だとの意見が市民から寄せられていた。敷地についても拡張できる余地がなく、病棟の増設は困難であるため、市としては徳島駅に近い市の中心部で本格的な総合病院を建設できるように強く望んでいた。

6. 徳島市民病院（寺島本町西）

昭和21年から22年にかけて、徳島市は北福島町の市立診療所を徳島国民学校の跡地（現寺島本町西２丁目）に移転することを決め、建設資材として板東兵舎の分譲を受け、入手した資材で診療施設や病棟を建設していった。昭和23年５月１日に市立診療所は北福島町から寺島本町に移転し、総合病院を目指して施設の整備と内容の充実を図っていく。昭和24年８月１日の徳島新聞の記事は次のように報じている。「敷地700坪(2,310平方メートル)、延べ建坪400坪（1,320平方メートル)、ベッド数50床、診療科目は内科、外科、小児科、耳鼻咽喉科、産婦人科、放射線科、眼科を予定。院長は現診療所長の永谷鼎氏が内定している。工費は1,200万円を投じて10月はじめに完成する」と。

木造２階建ての新しい病院は９月はじめに完成し、同月22日に市立診療所を徳島市民病院と改称した（図８)。その開院式は昭和25年６月13日午前10時から当病院で行われ、同日午後、市議会議場において大阪大学黒津医学部長による学術記念講演会が開かれている。

寺島本町西において開院した市民病院は場所的に便利なところに設置できたが、市有地が狭隘であったため、その後の増築などが思うに任せず、苦労する。その中で設備の近代化と施設の拡充を図り、病床数については、昭和24年の市民病院として診療を始めた時点が50床、同25年59床、同26年75床、同29年130床、同31年に175床、同38年は196床にまで増床している。

2007年（平成19年）２月28日付の徳島新聞夕刊の記事に「一枚の写真ものがたり徳

図８．徳島市民病院（寺島本町西）

島市民病院（1958年)」が出ている（図９)。この写真を見ると、1958年（昭和33年）当時の寺島本町西の市民病院の建物と戦後復興期の街の様子が懐かしく思い出される。記事の内容は、昭和３年２月に始まる市立実費診療所から中洲病院、新蔵町の市民病院、県立医学専門学校附属病院に至る市民病院変遷の歴史と、戦後の復興期のなかで地域医療に貢献した寺島本町西の市民病院が簡潔に紹介されている。

昭和36年頃のことであるが、私が高校生の時、この寺島本町西の市民病院に来たことがある。城南高校の文化祭で「がんの展示」をすることになり、生物部の先生から市民病院でがんの手術標本を借りてくるようにといわれたからである。当時外科部長を兼務していた副院長先生にお会いして、ホルマリン処理した胃がんや大腸がんの手術標本をお借りした。このとき余程緊張していたのか、副院長先生が言われたことを今でも鮮明に憶えている。何でも先生はつい最近大阪から吉野川河口に着く水上飛行機で徳島に赴任してきたとか、助任（スケトウ）という変な名前のところに住んでいるとか、子供さんが徳大の附属小学校に通っていることなどである。

当時は良く知らなかったが、この先生が胃

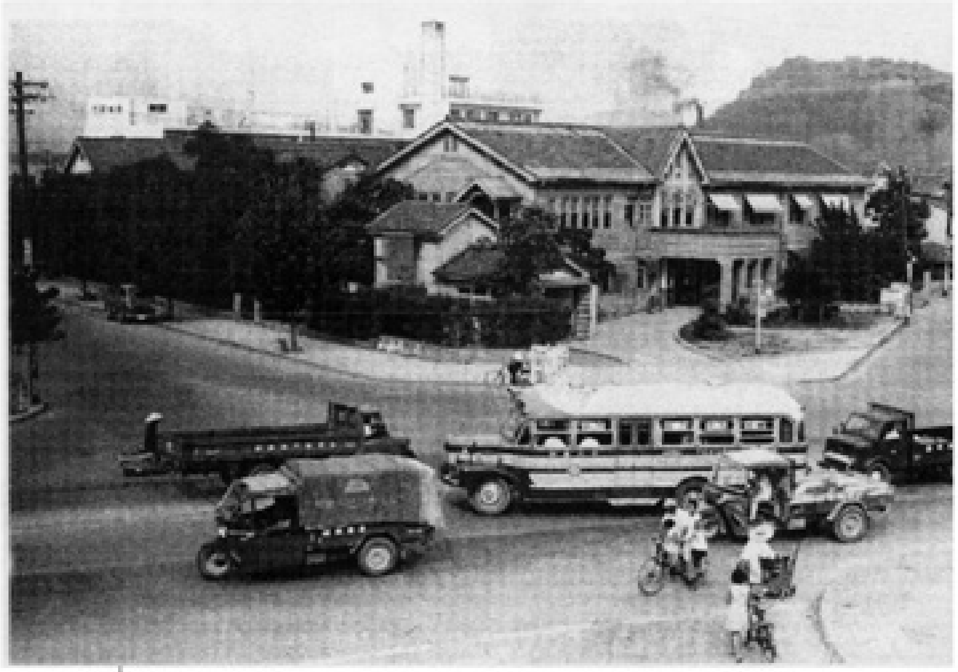
がんの名医として有名な伊藤一二先生で、その後東京築地に新設された国立がんセンター中央病院の外科部長となり、後年都立駒込病院の院長をされた。私が外科医となり学会などでお会いすると、いつも「君、徳島だったね。僕は徳島市民病院にいたんだよ」と関西人らしい気安さで、この寺島本町にあった市民病院の話をよくされたものである。

Meet&Talk

一枚の写真ものがたり

徳島市民病院

（1958年）



市民の医療拠点として戦後復興期から高度成長期前半にかけて寺島本町西にあった徳島市民病院＝1958年、本社所蔵写真

道路を行くオート三輪にボンネットバスやスクーター。その手前には手押し車を押す人、自転車に三人乗りをした人の姿も写っている。なんとなくのんびりした感じに見えるのは、道路に信号もなく、写っている車両以外に自動車が見られないからだろう。

写真は一九五八（昭和三十三）年に徳島市寺島本町西で撮影されたもの。当時の道路交通事情がよく分かると同時に、後方に木々に囲まれ、車寄せを備えた立派な建物が写っていることに注目したい。この建物は現在、市内北常三島町二で改築が進んでいる市民病院が寺島本町にあったころの姿である。

復興期の医療に貢献

市民病院の歴史は古く、その前身は一九二八（昭和三）年二月に徳島町にあった市役所に隣接して開設された「市立実費診療所」である。二年後、幸町にあった私立病院を買収して移転、「中洲病院」と改称したが、患者数の増加とともに手狭となり三九年五月、新蔵町に新築移転して「市民病院」の名称で呼ばれるようになった。

新蔵町の市民病院は四三年、県立医学専門学校付属病院になるが四五年七月の空襲で焼失した。同時に市内の多くの病院が焼け、仮診療所を設置するなどで急場をしのいだものの、病院を要望する声は強くなる一方だった。そこで五〇年六月に完成したのが、写真にある徳島市民病院だった。

病院用地には元徳島国民学校の跡地が利用された。戦後の復興期から高度成長期まで市民医療に貢献した同病院は、さらに医療施設を強化するために六六年、現在地に新築移転した。

（文・吉本旭写真部副部長）

図９．徳島新聞（夕刊）2007 年 2 月 28 日

7．徳島市民病院（北常三島町）

寺島本町西の市民病院は、戦災復興期の中で応急的に建設され、診療を続けていた。利用者の増加とともに市民の要望に応えるため診療科目を増やし、病棟の建て増しを何度も行い、市民の医療機関としての役割を果たしてきた。しかし、これ以上の増築や拡張は現在地においては無理であり、将来の医療の高度化への対応や、病院の機能的な運営などには適さなくなってきた。そのため徳島市は病院の移転改築を考え、昭和39年6月に豊田幸太郎市長は、新しい市民病院の構想について次のように発表した。

病院の規模は現行のベッド数196床を320床にする。建物は鉄筋コンクリート6階建て延べ床面積は1万2,000平方メートル、建設費4億5,000万円で3ヵ年計画とする。移転先は中徳島町の市立動物園を眉山に移し、その跡地に建設するというものであった（昭和39年6月10日付徳島新聞）。

この案は動物園の移転を前提としていたのに、動物園の移転が所管の産業交通委員会で継続審議になってしまったため、市民病院の移転先が宙に浮いて決まらず、移転用地については引き続き検討することとして、市民病院の移転改築案は継続審議となった。その後移転候補地を種々検討した結果、北常三島町2丁目に移転先を決定、新たに4,000坪の敷地を求めることにし、用地買収費および造成費を加え総事業費6億4,700万円で市議会の可決を得た。

なお市民病院の移転改築によって、病床規模が拡大されることに反対の意志を表明した地元医師会は、市民病院移転改築に反対する請願書を提出していたが、これは市議会で不採択となった。その後においてもベッド数の制限や外来患者の受付制限などの申し入れがあり、市と医師会で話し合ったが解決に至らず、県知事の調停によって解決するといった一コマもあった。

新病院の起工式は昭和40年4月6日午前10時から北常三島町2丁目の現地で行われた（図10）。その後工事は順調に進み、新病院は昭和41年9月に完成した（図11）。落成式は同年9月25日午前10時から新病院1階ロビーで行われ、式には豊田市長、篠原義平市議長、岩崎基市民病院長ら市関係者のほか、厚生大臣代理の松本隆夫同省四国地方医務課長、武市恭信知事、北村義男徳島大学医学部長ら来賓合わせて約300人が出席し盛大に行われた（図12）

図10．徳島市民病院起工式

図11．徳島市民病院（北常三島町）

図 12. 徳島市民病院落成式

図 13. 手術中の矢野先生（右）
助手・惣中先生（左）

この新しい病院は９月27日を病院内参観日として一般市民に公開された。寺島本町西の病院から北常三島町の新病院への引越しは、同月28日に荷物の引越しが行われ、翌29日に入院患者80名は貸切の市バスと救急車で移動し、すべての引越しが無事完了した。

市民病院の医師は昭和３年の開院以来、大阪大学から派遣されていたが、この新病院への新築移転を期に大半の医師が徳島大学出身者に入れ替わった。私は新病院が完成して間もない昭和46年はじめに、この病院の外科に短期間勤務したことがある。外科の中川利一先生が市内大和町で開業されることになり、徳島大学病院から急遽派遣されたのである。当時は矢野嘉朗外科部長の時代で、橋本先生が徳島で初めて脳外科を開設され、外科および脳外科部門は非常に活気に満ちていた（図13）。

新病院は地下１階、地上６階建て白亜の鉄筋コンクリート造りの建物で、玄関を入ると１階ロビーが吹き抜けになっていて、開放感のある素晴らしい病院であった。病院の裏にはテニスコートがあって、診療が終わった夕方に岩崎院長はじめ各科の医師や放射線技師が集まり、あたりが暗くなるまで軟式テニスを楽しんだものである。しかし、新病院は前の寺島本町の病院と違って市中心部から離れた場所にあり、当時は交通も大変不便であった。そのため開院当初は患者数が増えず、病院経営は赤字状態が続いていた。

昭和54年に麻酔科が新設され、昭和55年に病院増築工事として３階建ての新館（１階診療棟、２階手術室、ICUおよび一般病棟、３階管理棟）が完成した。病床を18床（ICU ６床、一般12床）増床し、泌尿器科も新設された。さらに昭和57年に一部４階建ての新館（１階診療棟、２階病棟、３階管理棟、４階病歴管理室）が増築され、総病床数437床（一般397床、伝染40床）となり、総合病院としての診療体制が整えられた。矢野院長はじめ当時の若くて有能な職員が一丸となって診療内容の充実を図るとともに経営改善に努め、アッという間に経常収支を黒字化し、市民病院は経営健全化に成功したのである。

数年前のことであるが、当時病院長をしていた私は度重なる経常収支の赤字に苦しんでいて、矢野先生に病院経営のコツをお聞きしたことがある。矢野先生曰く、「あれは妙なもんじゃなあ、一度良くなるとずっと良くな

る」と。それを聞いて私は「そんな簡単なもんかなあ」と思いながらも、ホッと安堵したことを憶えている。恐らく先生は、私の心情を察して「そんなに心配するなよ」と励ましてくれたのであろう。

昭和60年4月に私は徳島大学病院第2外科より再び派遣され、2度目の市民病院勤務となった。年齢は40歳であった。病院長は阪口彰先生で、森本重利外科部長の時代である。徳島ではじめて開業医との共同診療用のオープン病床29床が開始された頃である。中央放射線部に体外衝撃波腎・尿管結石破砕装置が設置され、MRI棟の新設など新しい医療機器が続々と導入された。産婦人科病棟は新生児であふれ（図14)、病院の経営状態は毎年黒字の連続であった。そして昭和61年に市民病院は地域医療の確保に重要な役割を果たしている病院として、全国自治体病院開設者協議会および全国自治体病院協議会の両会長より自治体立優良病院表彰を受けたのである（図15)。この記念の楯は今も院長室に飾られており、市民病院の全盛期の象徴として燦然と輝いている。

当時は外科、脳外科、産婦人科、整形外科など外科系診療科の診療体制が充実し、病院として成熟期を迎えており、地域住民から選ばれ、信頼される病院になっていた。阪口院長が退任される時に、「これだけの病院はなかなか作れないよ」といわれたことを今も鮮明に憶えている。この受賞記念の楯を見るたびに、市民病院にもこんな輝かしい時代があったのだと、赤字続きの病院長時代に何度勇気づけられたことであろうか。

当時市民病院には眉誠会という職員の互助会があり、給料から天引きされた費用でいろんな同好会やクラブへの援助がなされていた。野球、ソフトボール、テニス、バレーボール、ボウリング、ゴルフなどスポーツクラブばかりでなく、お茶、お花、日本舞踊や釣りクラブなどもあり、各種大会の開催や、阿波踊り、職員旅行、忘年会など、仕事だけでなく職員の親睦を図る趣味のサークル活動が盛んに行われていた（図16)。特に忘年会は徳島市の冬の風物詩の一つといわれるほどの大宴会で、市長をはじめ300名を超える出席者があり、各部署から余興もたくさん出て、歌って踊っての楽しい思い出となっている（図17、18)。

私は小唄の会に入っていた。毎週土曜日の午後に花街から芸暦50年という年配のお師匠さんが来られ、病院別館2階の日本間でお

図14. 新生児病室

図15. 自治体立優良病院表彰

図 16. 眉誠会ゴルフ大会

図 18. 眉誠会忘年会　日本舞踊（お夏清十郎）

図 17. 眉誠会忘年会

稽古を受けていた。凛と響く三味線の伴奏でお師匠さんから小唄のおさらいを受け、それを録音テープにとって病院への行き帰りに車の中で毎日練習していた。徳島は芸どころであり、阪口院長をはじめ安達副院長や看護師長、放射線科技師長など小唄会の面々はみんな芸達者で、一流料亭での新年会や夏のゆかた会で自慢ののどを披露し、唄や踊りをずいぶん楽しんだものである（図 19）。小唄は日

図 19. 小唄発表会（新年会）

本情緒があってとても良かったが、お師匠さんが高齢で亡くなると小唄会は自然消滅し、まさに滅びの芸であったようで残念でならない。

昭和の終わりから平成のはじめ頃は日本社会が高度経済成長期に入り、社会全体が明るく希望に満ちていた。職場は家族的で、仕事も遊びも病院とともにあり、職員の満足度も高かったように思う。「禍福はあざなえる縄の如し」といわれるが、このような良い時代は長く続かなかった。その後病院の建物が古くなり新しい医療機器が導入できなくなると、職員のモチベーションが落ちて医療を取り巻く環境変化に対応できなくなり、病院の経営状態は次第に悪化していった。平成4年から経常収支が赤字に陥り、その後一度も改善することなく毎年多額の赤字を計上する深刻な状況が続いた。職員の経営改善への努力も空しく平成16年より不良債務が発生し、このままでは市民病院の存続が危ぶまれる事態となったのである。

このような状況の中で徳島市は、かねてより計画していた現在地での新病院建設に取りかかることになる。そして市民病院の経営改善を目的に、平成18年より徳島赤十字病院の湊省先生を病院事業管理者として招聘し、新病院の建設と経営改革を一層進めていく。私はこの変革期の病院長に選任され、湊先生とともに価値ある地域の中核病院を目指して、新しい病院改革に取り組むことになった。院長就任祝賀会で原市長はじめ湊先生、歴代の市民病院長や職員から身に余る賛辞をいただき（図20）、その責任の重大さをひしひしと感じながらも自分達にこの大きな病院改革が果たして出来るのであろうかと期待と不安の入り混じった複雑な心境になった。

図20. 院長就任祝賀会

8. 新徳島市民病院（北常三島町）

現在、北常三島町2丁目に聳え立つ新徳島市民病院は平成15年に基本設計、平成16年に実施設計が策定され、同年9月より新病院の建設が着工された。今回の建設は狭隘な旧病院隣接地での建て替えとなり、工期は2期に分割された。1期工事の地盤掘削中に病院周辺家屋の地盤沈下をきたし、工事は一時中断され、工期は予定より大幅に延びることになった。これは建設地が吉野川河口に近い場所にあり、軟弱な地盤によるものである。

新病院1期工事の落成を祝う開院式は平成20年1月5日当病院において挙行された（図21、22、23）。原秀樹徳島市長（図24）をはじめ、副市長、市議会議長、市議会議員など多くの市関係者のほか、徳島大学関係として香川征徳島大学病院長（図25）、徳島大学医学部教授、県関係として里見副知事、保健福祉部長、県議会議長ならびに徳島区選出の県議会議員、医師会関係として川島周県医師会長、豊﨑纏市医師会長、郡市医師会長ならびに医師会会員など招待者142名を含む関係者300余名が出席して盛大に行われた（図26、27、28）。

図22. 開院式（2F外来ホール）

図23. 開院式（テープカット）

図21. 開院式

図24. 原市長

図25. 香川徳島大学病院長

図 26. 開院式（1 F 待合ホール）

図 29. 11F 病室からの眺め

図 27. 内覧会（NICU）

図 30. 屋上より吉野川を望む（国道 11 号線）

図 28. 内覧会（屋上ヘリポート）

翌１月６日には一般市民への新病院内覧会が開催された。新規導入されたCT、MRI、リニアックなど高度専門医療を担う新病院の医療機器が紹介され、それと同時にアメニティの良い入院病室や外来診察室なども公開された。多くの市民や地域住民が来院され、新病院の諸設備を見学した後、12 階の屋上ヘリポートから吉野川河口に拡がる抜群の眺望を楽しまれた（図 29、30）。

旧病院から新病院への引越しは、平成 20 年１月 25、26、27 の３日間をかけて慎重に行われた。今回は隣接地への移転であり、物品の輸送や患者の搬送は順調に行われ、何のトラブルも発生しなかった。特筆すべきこととして、移転当日に思いがけない出産があり、新病院の手術室で初めて手術（帝王切開術）が行われ、元気な双生児が生まれた（図 31）。新しい病院の門出を祝福するかのような記念すべき出来事のひとつである。

新病院は平成 20 年１月 28 日から開院となった。電子カルテはすでに旧病院において導入され、職員は電子機器の操作に慣れていて新病院への移行は順調に行われた。その後旧病院の解体工事が進められ、それと同時に新病院の拡張工事も行われ、平成 21 年 12 月に新病院２期工事が竣工した（図 32、33）。そして平成 22 年３月に立体駐車場を含めた外構工事が完成し、同年６月より医局として

新徳島市民病院が開院

入院患者120人移る

あすから外来診療

新施設で双子誕生

花束贈られ笑顔

図 31. 徳島新聞　2008 年 1 月 27 日
新病院で双子誕生

使われていた 11 階病棟 30 床が供用開始され、この時点より新病院の全病床 339 床がフルオープンし、現在に至っている（図 34、35）。新病院は旧病院の隣接地での建て替えとなり、建築着工から１期および２期工事を含めて完成までに５年９ヵ月という長期間を要したことになる。

新病院の施設概要は次のとおりである。構造は鉄骨鉄筋コンクリート造（免震構造）、地下１階、地上 12 階、塔屋１階。敷地面積 15,539.25 平方メートル、延べ床面積 30,194.50 平方メートル。病床数 339 床〔一般 295 床（ICU 6、NICU 6、GCU 9 を含む）、回復期リハビリテーション病床 40 床、人間ドック病床４床〕。

この旧病院から新病院へ移行する過程で、徳島市は度重なる病院赤字からの脱却を目指して、市民病院の経営形態を変更するという

図 32. 新病院２期工事竣工

図 33. 新病院１Ｆ　エントランスホール

図 34. 新病院完成（平成 22 年６月）

図 35. 吉野川河口より新病院を望む

大きな病院改革を断行した。全国的にも公立病院の財政赤字が問題となり、徳島県も地方公営企業法の取り扱いを変更して病院事業管理者を招聘したところであった。

平成18年に徳島市は病院の経営形態をそれまでの地方公営企業法、一部適用から全部適用に変更し、独立性を高めた組織による医療現場と直結した運営を図り、経営健全化を目指すことになる。そして前にも述べたように病院事業管理者として徳島赤十字病院副院長の湊省先生を招聘したのである。湊先生は市民病院を見て、急性期医療を担う地域の中核病院と位置づけ、①救急医療の充実、②密度の濃い連携医療の構築、③魅力ある臨床研修病院の3つの病院目標を掲げ、診療実績として紹介率および逆紹介率を上げること、入院患者の在院日数の短縮を図るなど、急性期病院としての経営指標を明確に打ち出して改革していく。

私は病院長として市民病院の医療の質を向上させるために、平成18年に前倒しで旧病院に電子カルテを導入し、懸案であったカルテの一元化を行い、病院機能評価の受審を進めるとともに、DPC対象病院になることを目指した。入院病床については、空床の目立った一部の病棟を閉鎖してダウンサイジングを行い、7対1入院基本料の施設基準をクリアする看護体制を早期に敷くことが出来た。

平成20年1月の新病院開院とともに初期臨床研修医が大挙押し寄せ、市民病院に強烈なインパクトを与えた。何よりも若い医師のエネルギーで、それまで沈滞気味だった病院の雰囲気は明るくなり、市民病院全体が活性化されたのである（図36、37）。また研修医の増加は、病院にとっても指導医の養成をはじめ、臨床研修病院としての教育体制を一層充実させていくことになった。

図36. 初期臨床研修医（屋上にて）

図37. 臨床研修終了式（女医3人娘）

この平成20年にDPC対象病院の認可を受けるとともに、県から地域医療支援病院の承認も得られた。平成21年に病院機能評価機構の認定病院（図38）となり、平成22年に地域がん診療連携拠点病院にも認定された。また、厚生労働省において、多年にわたり産科医療の確保に寄与した病院として厚生労働大臣表彰を受けた（図39）。続いて平成23年に高度な周産期医療を担う施設として地域周産期母子医療センター、平成24年3月にはDMAT病院（図40）、次いで災害拠点病院の認定も受け、市民病院は名実ともに高度急性期医療を担える地域の中核病院として、その診療体制を整えることができたのである。

図 38. 日本医療機能評価機構認定証

図 39. 厚生労働大臣表彰

このように医療の質を高め、各種の認定条件をクリアして施設認定を受ける中で、少子高齢化社会に向けて救急医療、小児・周産期医療、緩和ケアを含むがん医療、さらには高齢者の運動器障害に対する脊椎・人工関節センターの新設など専門的な医療機能の強化を図り、市民の医療ニーズに応える診療体制を構築していった。市民病院の一連の改革は未だ道半ばであるが、平成 22 年度の病院収支決算で長年の懸案であった財政赤字からの脱却を果たし、市民病院としては 19 年ぶりに経常収支の黒字を計上することができたのである。そして平成 23 年度も引き続き黒字会計を計上できそうである。

病院収支の改善は診療報酬制度の改定に多くを依存しているが、最近の市民病院の経営改善は、長年にわたって負のスパイラルに陥っていた財政赤字からのＶ字回復であり、新病院建設を好機と捉え、この時代に相応しい新しい医療への変革に挑戦した市民病院全職員の努力の賜物である。徳島市のような病床過剰地域おいては、都市型の医療体制を整えることを施策の機軸として、より専門性を発揮した病院の役割分担と特色を目指して、すべての職員が医療の質の向上を図るとともに経営改善に努めた結果が市民や医療関係者に認知され、信頼感を得つつあるといえるのではないだろうか。

ここに至るまでには多くの方々の温かいご指導とご支援をいただいたことに感謝している。とりわけ徳島市の原市長をはじめとする

図 40. DMAT 協定締結式

行政や市議会の皆様方、さらには徳島大学病院の各医局および徳島市医師会員をはじめとする多くの医療関係者の方々に対して深甚なる謝意を申し上げる。また、市民病院をご利用いただいた多くの徳島市民および県民の皆様にも心より御礼申し上げたい。

以上、昭和３年に市立実費診療所として誕生してから85年に及ぶ徳島市民病院の歩みを、徳島市史などを参考にしながら私見を交えて概観してみた。私はそのうち最近の30年間をこの病院にお世話になったことになるが、今回改めて市民病院の古い資料を拝見していて、この病院には先人たちから伝えられてきた素晴らしい伝統と文化が脈々と息づいているように感じられた。その先人たちが何を考え、どういう犠牲を払って何を達成し、何を達成できなかったのか、どれを継承していくか、捨てるものがあるとしたら何か、われわれは過去の蓄積の上に現在があるということを忘れないで、先人たちの思いも結集して、更なる市民病院の改革に挑戦していきたいと心を新たにしている。ものを作り直すというのは自分たちの歴史に真摯に向き合うことでもある。

わが国は昨年３月11日未曾有の東日本大震災と福島第一原発事故による複合災害を受け、その復旧・復興に国を挙げて取り組んでいるが、少子高齢化、人口減少社会を迎え、先行き不透明な閉塞感の漂う困難な時代に突入している。ユーロ危機など世界同時経済不況もあり、病院を取り巻く環境は依然として厳しい現状にあるが、市民および地域住民の命と健康を守るため、市民病院は新しく再生し、地域の医療機関と機能分担・連携を強化しながら良質な医療を効率的に提供し、継続して成長していく。そして「この病院があるからこの街に住んでみたい」「この病院があったからこの街に住んで良かった」といわれるように、将来にわたって市民から信頼され、水都徳島の豊かな街づくりに医療面から貢献すること、これが公立病院としての徳島市民病院の使命であり、責務であるといえよう。

最後に市民病院に関する古い資料が散逸することなく徳島市史編さん室に残されていたことに感謝するとともに、それぞれの時代の中で困難な舵取りをされた歴代の市民病院長の名を記して本稿を終わることにいたします。今後とも市民病院をご支援賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

徳島市民病院歴代病院長（年月日は就任日）

初代	小山順治	昭和５年７月21日
２代	永谷　鼎	昭和21年８月20日
３代	日置達雄	昭和27年３月15日
４代	山口　寿	昭和35年９月16日
５代	岩鶴龍三	昭和36年11月15日
６代	清　英夫	昭和39年１月１日
７代	角野義三	昭和41年１月１日
８代	岩崎　基	昭和41年９月17日
９代	矢野嘉朗	昭和47年６月２日
10代	山田憲吾	昭和47年10月17日
11代	油谷友三	昭和49年１月１日
12代	矢野嘉朗	昭和51年６月２日
13代	阪口　彰	昭和59年４月１日
14代	先川知足	平成７年４月１日
15代	森本重利	平成８年４月１日
16代	日下和昌	平成16年４月１日
17代	露口　勝	平成18年４月１日
18代	惣中康秀	平成22年４月１日

主な参考図書

- 徳島市史　第５巻　民生編　保健・衛生編平成15年刊
- 小山　順治著　一診療所長より大学病院長まで　1969年
- 徳島市医師会史〔85年の歩み〕（徳島市医師会）
- 徳島大学医学部50年史（徳島大学医学部）

徳島市医師会報「ぞめき」第9～12号（平成24年）より転載